

# 藤村が描写した授業風景

(前略) 学士は、手にしたコップをすこし傾げて見せた。炭素はその玻璃板の蓋の間から流れた。蠟燭の火は水を注ぎかけられたように消えた。無邪気な学生等は学士の机の周囲に集って、口を開いたり、眼を円くしたりして眺めていた。(中略) そのコップの中へ鳥か鼠を入れると直に死ぬと聞いて、生徒の一人がすつくと立上った。

「先生、虫じゃいけませんか」

「ええ、虫は鳥などのように酸素を欲しがりませんからナ」問をかけた生徒は、つと教室を離れたかと思うと、やがて彼の姿が窓の外の桃の樹の側にあらわれた。

(中略) 庭に出た青年は茂った桜の枝の蔭を尋ね廻っていたが、間もなく何か捕まえて戻って来た。それを学士にすすめた。「蜂ですか」と学士は気味悪そうに言った。(中略) その蜂をコップの中へ入れた時は、生徒等は意味もなく笑った。「死んだ、死んだ」と言うものもあれば、「弱い奴」というものもある。蜂は真理を証するかのように、コップの中でグルグル廻って、身を悶えて、死んだ。(後略)



## 解説

### 実験

当時一般に行われていた知識注入中心の授業と

化されている様子が見られる。

同僚の鮫島が教えている理科の授業のひとつである。石灰石に塩酸を加えて二酸化炭素を発生させ、その性質を調べる

は対照的に、実際に実験・観察を通して生徒の気づきや考えを大切に、一人ひとりの学ぶ意欲を高める授業である。小諸義塾の精神が具現化されている様子が見られる。

## 小諸義塾の歴史

- (明治)26年11月 小諸義塾が耳取町に開校 塾長 木村熊二
- 27年 校舎を大手門に移す 塾内に図書館を設ける
- 29年 小諸駅南に塾舎本館を建築
- 30年 小諸義塾規則を定める 月謝は専修30銭 兼修50銭
- 31年 塾長木村熊二の書齋「水明楼」を建てる
- 32年 私立中学校令により県知事の認可があり、私立中学校の教育課程を実施 島崎藤村、三宅克己が教師として着任
- 33年 小諸町議会、北佐久郡会が補助金増額を決める
- 34年 女子学習舎創立
- 35年 義塾修業年限を四年に、月謝1円と改める 丸山晚霞が三宅克己の後任として着任 徒歩で野辺山から甲州、諏訪方面への4日間の修学旅行を実施
- 36年 小諸義塾十周年記念式を挙げる
- 38年 島崎藤村、義塾を退職し上京
- 39年3月 日露戦争を契機にして、国家の教育制度に阻まれ小諸義塾閉塾



▲小諸義塾の建物は、義塾閉鎖後、小諸商工学校や小諸幼稚園の校舎として使われた。その後、市内の医院で診察室や病室として使われた。平成6年に市に寄贈され、かつての校地の向かいに小諸義塾記念館として復元移築。



▲記念館は、当時の造りを再現した建物となっており、教科書や写真などが飾られ、小諸義塾で学ぶ学生たちの様子が見られる。



**丸山 晚霞**  
(1867~1942)

三宅克己の後任として小諸義塾の教師となる。日本水彩画研究所の開設に尽力する。



**三宅 克己**  
(1874~1954)

明治学院卒業。図面教師として着任。明治、大正にかけての水彩画の先駆者として知られる。



**鮫島 晋**  
(1852~1917)

東京物理学校(現東京理科大学)創立者の一人。数学・物理・科学などを教える。